



👁️👁️ みどころ

『僕の帰る場所』（17年）に続いて、私が出資した藤元明緒監督の本作が、「第33回東京国際映画祭」に続いて、「第16回大阪アジア映画祭」で上映。コロナ騒動によって“小さな映画”の公開が困難になっている状況下、5月1日からは東京でも大阪でも劇場公開が決定しているから、それもすごい！

今年2月の“軍事クーデター”によって、今ミャンマーは大変な状況になっているから、奥さんの実家がミャンマーにある藤元監督は心配だろうが、頑張ってもらいたい。私ができるのは義援金での協力くらいだが、“香港問題”と“ミャンマー問題”はしっかりウォッチングしていきたい。

なお、2度目の鑑賞後も私は本作のタイトルは企画段階の『フォンの選択』のほうが良かったのでは、と思ったが、さて・・・？

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*

■東京に続いて大阪でも劇場公開！ヤッター！■

去る3月5日、オンラインで開催されていた「第71回ベルリン国際映画祭」のコンペティション部門の受賞結果が発表され、濱口竜介監督の『偶然と想像』（21年）が審査員大賞（銀熊賞）を受賞した。同賞は最高賞の金熊賞に次ぐ位置づけだから、すごい。また、同映画祭では過去、寺島しのぶと黒木華が最優秀女優賞（銀熊賞）を受賞しているが、作品に対する賞は、2002年に宮崎駿監督の『千と千尋の神隠し』（01年）が金熊賞を受賞して以来だ。

他方、在日ミャンマー人の移民問題と家族の愛を描いた前作、『僕の帰る場所』（17年）（『シネマ41』105頁）に続いて、藤元明緒監督がチャレンジしたのが本作。2014年に、ある友人の紹介で、若き藤元明緒監督と若き渡邊一孝プロデューサーを紹介され、『僕の帰る場所』に出資することを決めた私は、2017年に完成した同作の成功に驚きつつ、

無条件に次作への出資を決定した。2019年11月には、青森での撮影に出かける渡邊一孝氏らと東京で会食し、本作の完成を願っていたが、翌2020年の夏に完成。そして、2020年11月3日には第33回東京国際映画祭で上映されることになった。さらに、今年5月1日からは、東京の「ポレポレ東中野」での公開に続き、大阪でも「シネヌーヴオ」での劇場公開が決まっている。

それに先立って、3月5日から3月20日に開催されている「第16回大阪アジア映画祭」でも上映されることになった。しかし、3月13日には改めて本作を鑑賞すると共に、その直前直後には久しぶりに藤元明緒監督、渡邊一孝プロデューサーと談笑することができたから、大満足！

■□■ミャンマーは今大変！義援金は？■□■

前作『僕の帰る場所』の完成後、2017年には私の都島の自宅に、藤元明緒監督と渡邊一孝プロデューサーが集まって会食したが、その席には藤元明緒監督の奥さんも駆けつけてくれた。その時の奥さんのお腹はパンパンだったが、今日奥さんが劇場に連れて来ていた息子は、既に2歳近くになっているとのこと。時の経つのは早いものだ。私は藤元明緒監督の奥さんがミャンマー人だと知っていたので、2021年2月に発生したミャンマーでの“軍事クーデター”を心配していたが、連日のニュースによれば、軍部の圧政はますます強まり、反政府デモへの弾圧も強化され、死者さえ出ている状況だ。そんな心配を藤元明緒監督の奥さんに直接ぶつけ、実家の悲惨な状況聞いてみると・・・。

日本は2011年3月11日に発生した東日本大震災から10年の節目を迎えたが、ミャンマーでテイン・セイン率いる政権が発足し（同時に国名も変更）、民政移管が実現したのも2011年3月だ。移管された民政は2016年3月からアウンサン・スー・チー氏率いる国民民主連盟（NLD）に引き継がれ、ミャンマーの本格的民主化が始まると、全世界の期待は急速にそこに集まった。それまで中国一辺倒だった日本企業の海外進出も、急速にベトナムに移り、更にミャンマーに移っていった。そして、現行憲法の制約上、ミャンマーの大統領に就任できなかったアウンサン・スー・チー氏は、国家最高顧問、外務大臣兼大統領府大臣として実質的に新生ミャンマーを指導し、2020年11月の総選挙では様々な逆風にもかかわらず圧勝した。ところが、「禍福は糾える縄の如し」とはよく言ったもので、この総選挙によって追いつめられた国軍は遂に2021年2月に軍事クーデターを起こすことに。クーデター後はデモや不服従運動など、国軍への抵抗はいろいろと展開されているが、抵抗への圧力、弾圧は強いし、戒厳令まで発行されているからコトは重大だ。それは、「一国二制度」を巡って香港で繰り上げられた圧力、弾圧以上で、既に死者も多数出ている。それに対して、今や民主派は臨時政府の樹立を目指しているから、その闘争が長期化していくのは必至だ。

そんな状況下、今の私にできることはせいぜい義援金への協力しかないのも、それを申し出ると、現金ではなく振り込みしてもらいたい、とのこと。なるほど、それはその通

りだと納得し、私は振込先の連絡を待つことに。この際思い切った金額をミャンマー民主化支援のため、寄付することとした。

■□■ “協賛者” の1人として、更なる協力を！ ■□■

映画は作るのが大変なら、劇場公開するのも大変。新型コロナウイルス騒動によって、昨年2月以降の映画界は、それが更に大変になった。そのことは『キネマ旬報 3月下旬特別号』の「2020年映画業界総決算 コロナ禍での映画界の行方 データが語る2020年映画界」を読めばよくわかる。邦画では『劇場版鬼滅の刃 無限列車編』（20年）の大ヒットがあったものの、ミニシアター（の経営）がいつまで持つかは、風前の灯火だ。

ちなみに、日本で1年間に劇場公開される映画は、洋画・邦画とも500ないし600本。しかし、2020年の邦画は506本（前年比73.4%）、洋画は511本（前年比86.8%）だ。他方、興行収入は邦画、洋画とも1年間に約1千億円強だが、2020年の邦画の興行収入は1092億円（前年比76.9%）に減少、洋画は34億円（前年比28.6%）に激減している。そんな状況下、本作のような小さな映画が、「第33回東京国際映画祭」でも、「第16回大阪アジア映画祭」でも上映できたのはすごい。また、東京でも大阪でも劇場公開できることになったのもすごいことだ。

また、「ポレポレ東中野」で公開するについては立派なチラシが製作されており、そこには、小さな字だが「協賛：坂和法律総合事務所」と書かれている。「Sakawa Law Office」のロゴのデザインも素敵だ。2020年は私と同世代の大阪の弁護士である廣田稔氏のプロデュースによって『天外者（てんがらもん）』が大ヒットしたが、これは大快挙。私の本作への協賛はそれには遠く及ばないが、協賛者の1人としてさらなる協力を！

■□■ タイトルはやっぱり『フォンの選択』の方が！？ ■□■

本作のタイトルは、企画段階においては『フォンの選択』だった。それが、いつ、どういう事情で『海辺の彼女たち(ALONG THE SEA)』に変わったのかについて、私は全然聞いていなかった。2020年11月3日に本作を鑑賞した後に、私は本作のタイトルは『海辺の彼女たち(ALONG THE SEA)』よりも『フォンの選択』の方がいいのではないかと。その理由は、その方が本作の核心をズバリついているから、そう思った。そこで私は、上映終了後のQ&Aの時間にそれを質問しようと考えていたが、残念ながら時間切れになってしまった。そこで、今日はその点をズバリ藤元明緒監督に直接聞いてみると、彼も『フォンの選択』にかなり固執したが、スタッフ全体の意見は『海辺の彼女たち(ALONG THE SEA)』の方が強かったらしい。

本作は全編88分だが、その後半はカメラがずっとフォン1人を追い続けていく。そして、フォンはラストで“ある選択”をするのだが、その“選択”に至るまでの心の動きや、その“選択”の是非をどう考えるかが、まさに本作のポイントだ。1年間に本作全編のストーリーを考え、また、ベトナムからの技能実習生の悲惨な実態という社会問題提起性を考えれば、『海辺の彼女たち(ALONG THE SEA)』のタイトルも悪くはないが、やっぱり私に

は『フォンの選択』の方がベター。さて、あなたは？

2021（令和3）年3月15日記